

第1回 金沢学生まちなか回帰検討会議

議事概要

【開催概要】

日時：令和8年7月8日（水） 16:00～17:30

場所：金沢市役所第二本庁舎 3階 大研修室

【議事要旨】

（1）座長選任

事務局から、金沢大学教授の篠田委員の座長選任を提案し、全会一致で承認

（2）事務局・委員からの説明

■事務局

- ・資料1に沿って本会議の設置目的及び学生・大学・まちなかを取り巻く現状と検討事項について説明。

■杉田委員

- ・自身が所属する「金沢まちづくり学生会議」が今年の5月に実施した同会議メンバーによるワークショップの結果を取りまとめた委員提出資料を基に説明。
- ・「金沢まちづくり学生会議」は、学生と市民との相互の交流や学生と金沢のまちとの関係が深まることで、にぎわいと活力が創出されるまちを学生目線で推進する母体として立ち上がった団体であり、活動において、「学生がまちなかに来ない要因」、「学生をまちなかに呼び込むための対策」についてワークショップ形式で議論を行った。
- ・学生がまちなかに来ない主な要因として、「大学周辺で生活が完結している」、「行く理由・目的が不足している」、「情報発信不足」、「若年層が居づらい雰囲気」、「交通費・移動負担の大きさ」といった意見が挙がった。
- ・学生を呼び込むための対策を考えるに当たって、「人とのつながりが来街動機になっている学生が多い」「まちなかでしかできない体験が求められている」、「イベントそのものより、知られていないことが課題」、「アルバイトきっかけにまちなかにくる学生は多い」、「気軽に行ける環境づくりが必要」といった意見が多く挙がった。

■笠原委員

- ・昨年度より、「未来へつなぐ金沢行動会議」に委員参加している。
- ・昨年度、学生をまちなかに呼び込むことを目的に実証的に実施した「夜だけ現れるバス停」に関する取組内容についての委員提出資料を基に説明。
- ・バイト終わりの学生をターゲットに、夜間の居場所として、また交通問題についても課題として取組んだもの。
- ・他大学の学生と出会えるということが、学生がまちなかに集まる一つの理由付けになるものと考えている。

(3) 意見交換発言要旨

■篠田座長

- ・金沢市として、学生の活動を支援する目的で色々取り組んでいることがあると認識している。
- ・今回の、「金沢学生まちなか回帰検討会議」という枠組みは、全国でも例の少ない取り組みと承知している。実現可能性を念頭に発言することなく、「こうなったらいいな」という理想を元に、忌憚なく意見交換を行いたい。

■高本委員

- ・地元商店街の立場として、学生の人たちにまちなかに来て欲しいという思いはある。
- ・商店街の取組について、学生に上手く情報を伝えることができていないという認識がある。
一方で、学生がまちなかで実施している活動について商店街が把握していないことも多い。
- ・そういった点から、商店街と学生とで情報を交換、共有するような場が必要だと考える。
- ・学生のまち市民交流館は商店街と学生との交流の場となり得るが、あくまでも主に活動しているのは学生団体であるため、一般の人には入り辛い雰囲気、少しクローズドな印象も受ける。
- ・商店街と学生のまちで主体的に活動している学生との情報の行き来が分断されている節があるのかもしれない。そういった点からも
商店街と学生との間で情報を共有させるようなプラットフォームのようなものがあると、関係性構築の
とっかかりになるのではないかな。

■西田委員

- ・自分自身は生まれも育ちもまちなかで、街を歩けば知った人がいるということが当たり前のものとして育った。
- ・最近の学生の傾向として、ある程度固まった一つの枠の中でコミュニティが完結しているといったことを良く聞く。今の学生は、人との繋がりやコミュニティを求めているのか、学生自身に聞いてみたい。

■紙谷委員

- ・中心市街地、特にいわゆる都心軸の再開発が目下の課題と承知している。
- ・学生をまちなかに呼び込む、あるいは、学生をキーワードにしたまちなかの活性化を考えると、
山側にある大学をまちなかに持ってくるという考え方はどうか。
例えば、研究室などといった大学の一部の機能をまちなかに持ってくるということが一つあり得る。
- ・また、定住人口を増やす観点からも、まちなか周辺の空き家を活用するなどして、若い人に
まちなかに住んでもらうことができれば、「まちなかに呼び込む」ということでなくで、
「まちなかに既にいる」ということになる。
- ・まちなかに住んでいる学生に居住地の周辺であるまちなかの活性化策について若い発想と一緒に
考えてもらうこともできるのではないかな。

■高田委員

- ・所属している青年会議所において、20代から30代のユース世代のメンバーで、まちなかをどうやった

ら活性化できるかというテーマで検討している。

- ・メンバーでのグループワークにおいては、「用事がない」「目的がない」という話しが良く出ている。
- ・何か活動する拠点みたいなものがまちなかにあることで、学生が集まってくるのではないかと、という感覚がある。
- ・旧新豎町小学校跡地や日本銀行金沢支店跡地については、学生が集まる拠点機能を取り入れてみても面白いのではないかと。
- ・夜の遅い時間までバスがないから、まちなかでバイトができないという話もあったかもしれないが、まちなかに学生が住んでみたらいいのではないかと思う。
- ・学生がまちなかに住んで、そこからバスに乗って学校に通う、ということがあってもいい。そうすれば、まちなかに常に学生がいる、という状況を作れる。

■篠田座長

- ・先ほど、西田委員より、「今の学生は人との繋がりやコミュニティを求めているのか」という発言があった。学生の委員の方については、その回答についても可能であればご発言願いたい。

■杉田委員

- ・色々な人がどのように考えているのか、また、大人がどのような思いで活動しているのかを知ることに関心があるため、個人的には知り合いが増えることは嬉しい。
- ・自分はまちなかに所属する学生団体の活動もあるため、まちなかを週に数回訪れている。また、学生団体での活動の時以外にも、一人で勉強する目的でまちなかに来ている。
- ・加えて、学生会議の活動の中で、他の学生団体の活動を知って、イベントなどに行くことがある。
- ・まちなかでの活動に興味を持っている学生は一定数いると感じる。・普段のコミュニティを離れてバイトしたいと考え、まちなかでバイトを探す学生は一定数いる。
- ・学生がまちなかに関係する情報に触れられる環境が求められていると思う。

■末本委員

- ・所属する学生団体の活動でまちなかに来ることが多い。
- ・大学の知人にまちなかに来る理由について尋ねると、「バイト」「友達と遊ぶ」といった回答が多い。
- ・まちなかでは色々なイベントをやっているが、学生向け、というような形で情報が届いていないのではないかと。
- ・所属する学生団体においても SNS を通じて団体の活動情報を発信しているが、学生団体の立場として、「まちなかの魅力」について学生向けに発信することが一定の効果があると思う。

■仁志出委員

- ・学生が興味を持つ分野、テーマというのは当然のことながら多岐にわたる。分野、テーマごとに学生がまちなかに集まる仕掛けが必要。
- ・まちなかにいる面白い人に学生が関わっていけるような仕組みが大切。そういった点から、学生と商店街などまちなかの人とを繋ぐコーディネーター的な役割が必要ではないかと。

- ・学生がただ参加するだけではなく、一緒に創り上げていくといった、学生自身が主体的に関わる仕組み作りも必要である。
- ・「学生がまちなかに住めばいいのではないか」、「学生が学ぶ場があればいいのではないか」という話があったが、その通りだと思う。
- ・学生がまちなかに来る理由としては、「学校で学ぶ」、「居住」、「遊ぶ」、「働く」、「活動」といった理由があるが、世界的にも学生のまちと言われる場所は、その全てが集約している場所であるように思う。
- ・まちなかに住める寮を作って、まちなかで地域の人と一緒に活動したい学生に居住してもらおうといった思い切った取組も必要ではないか。
- ・インカレ団体所属であったり、学校を越えて、地域を越えて、新しい価値観に触れたいという学生はまちなかを訪れようとするのではないか。
- ・文化という観点から、ただの参加者ということではなく、文化的創造に主体的に取り組みたい学生がまちなかに集まるような機運が高まると、学生のまちとして魅力が高まっていくのではないか。
- ・この取組を行うに当たり、改めて最新かつ必要なデータを収集するということも大事な観点。

■長南委員

- ・自身は他県出身であり、観光学を学ぶために現在の大学に進学したが、想像していたよりもフィールドワーク学習などにより、金沢のまちや地域を知る機会が少なく感じている。
- ・学生がまちなかに来る理由として、「遊び」や「バイト」が多いと承知しているが、大学の講義やワークショップをまちなかで行うことにより、必要に迫られる形で学生をまちなかに連れてくることも効果的ではないか。元々興味や関心がなくても、行ってみたら楽しかった、というケースもあると思う。
- ・金沢は複数の大学が立地していることが強みの一つであると感じている。「観光学」などの共通の学問テーマに対して、異なる大学に所属する学生が集まって合同で授業を受講するなど、まちなかで多様な大学の人と出会うことができるような仕組みを行政や大学が創出できたらよい。

■武本委員

- ・自分自身はまちなかをほとんど訪れない学生の一人である。
- ・訪れない理由は、交通費の問題が大きい。居住している場所からまちなかまで、バスで片道 300 円～400 円程度かかることが負担に感じている。
- ・まちなかで学生が楽しめる行事があるのか分らない。まちなかは飲み屋のイメージがあり、自分自身はお酒を飲まないの、まちなかを訪れる理由がない。
- ・交通の面で、無料とは言わないが、一般で利用する人よりも安い費用でバスが乗れる、あるいは、まちなかで実施されるイベントに参加した場合のインセンティブとして交通費を半額にするなどといった仕組みがあるとまちなかにも学生が訪れるのではないか。

■道本委員

- ・自身はまちなかに訪れない側の学生である。頻度は月に 2 回程度。
- ・自宅が金沢駅周辺にあるので、金沢駅周辺の商業施設で用事が終わってしまう。片町や香林坊に行く際

は、友達と一緒にカフェなどの飲食店を訪れる目的が多く、一人で行くことはない。

- ・まちなかは店から店の距離が離れており、移動のため歩く距離が長い印象があり、雨の時などは不便だと感じている。
- ・まちなかにふらっと一人でいけるイベントや場所があると良いのではないか。金沢駅周辺の商業施設はイベントをしているイメージはなく、反対に、まちなかはイベントやお祭りが頻繁に開催されているイメージ。その強みを生かしたら良いのではないか。

■笠原委員

- ・学生と商店街とを繋ぐような仕組みは必要だと思う
- ・今の若者は知っている人同士で枠を作ってしまう傾向があるように感じているが、若い層の趣味趣向の多様化は抗いがたい潮流。学生が興味を持つ分野ごとにまちなかへの回帰施策を検討する必要がある。
- ・まちなかに学生が関心を持つような色々なテーマを入れ、学生が主体的に関わる仕組み作りが必要。
- ・まちなかに多様な大学の学生が学べる拠点もあると良いのではないかと考える。

■入矢委員

- ・教育の現場にいて、専門性が異なり、特色を持った大学がそれぞれ郊外に立地している点が金沢の特長であるように感じる。
- ・それぞれの大学の特性を横で繋ぐ仕組みはあまりないと感じている。学生間など、小さいまとまりで繋がっているケースはあるように思うが、行政や地域が横ぐしの役割を果たし、異なる大学や学生を繋ぐ仕掛けやプラットフォームのようなものがあまりないと思う。
- ・学生自身、学校の中で関係性が閉じていることに不満を抱え、外と繋がりたいと考えている人もいるのではないか。
- ・大学、学生が持つそれぞれの特性、特技を生かした形で大学間、あるいは、大学と地域・商店街・地元住民などと繋がりを創出できる仕組みが必要と考える。また、一過性のイベントではなく、継続して繋がりを維持できるものを構築する必要がある。
- ・学生のまち市民交流館を知らなかったが、金沢の学生は恵まれているように思う。今ある場所も活かしながら、大学間を繋ぐ、地域とも繋ぐ、商店街とも繋ぐことができれば、学生たちも興味を持って、各人が持つ特技を生かしていきたいと思うはず。

■出原委員

- ・大学ではメディア情報学科に所属している。金沢市と連携の上、金沢駅鼓門でのプロジェクションマッピングや、しいのき迎賓館での「金澤月見光路」、昨年度には「KOGEI デジタルアートミュージアム」に参画するなど、まちなかで様々なプロジェクトを実施してきた。
- ・様々な活動を通じて、学生の「自分自身を表現したい」という思いを感じる。その表現の場が、学内ではなく、金沢のまちなかにあるということは、学生にとっては大変大きなモチベーションとなる。
- ・学生がまちなかの魅力を発信する事業に参画した際には、予定していた取組の他に、自主的にまちなかでのフィールドワークを行って、今まで関心を持っていなかったものにも興味を向けるようになり、改めて金沢のまちに魅力に気付く学生が多くいた。

- ・このように、大学で学んでいる専門性を活かした発表の場がまちなかにあることで、学生がまちなかに関心を持ち、まちなかを訪れ、結果として金沢の魅力に気付くというケースがある。
- ・自分事にできる、自分の活動ができる場所がまちなかにあると、学生は自ずとまちなかに集まるのではないか。
- ・なお、まちなかでの活動を大学時代に実施した学生は卒業後に県外に就職していても、自分が学生時代に関わったイベント実施の際などに、金沢に戻ってくる。学生時代のまちなかでの活動は、強い関係人口の創出にも繋がっているものと実感している。

■篠田座長

<上記議論を踏まえ総括>

- ・学生は特に、趣向性が個人的になっており、個々人が興味を持つテーマはバラバラになっている。
- ・これさえやれば、人が集まるということは難しいものであるが、一方で興味を持つ分野については、どこまでも行く、という性質もあるため、様々な仕掛けを頻繁に打ち込んでいく必要性がある。
- ・インセンティブ設計の視点も大切。一説によれば、1万円の価値があれば人は動く、という話もあり、それだけの体験価値を提供できれば学生が集まる可能性はあると思う。
- ・富山ではまちなかで授業を行うという取組が行われている。また、まちなかに学生を住まわす取組も実施しており、現在、検証も今行っていると承知している。
- ・今回の委員各位の意見を踏まえ、中長期的にどのような環境整備が必要となるのかということを経験しつづ、短期的には何ができるのかを並行して検討していく。
- ・検討の際のキーワードは、「繋がる」、あるいは「共創」だと感じた。
- ・「共創」というのは、単独の主体がやる（例えば、行政がやる、大学がやる、商店街がやる、学生がやる、そこに学生が顧客のように参加する）といったものではなく、みんなで一緒に考えるというもの。
- ・今の学生は真面目で授業の参加率が高い。ということは、平日の日中は忙しいと考え、平日の夜、あるいは休日が学生が動けるタイミングなのではないかと思うので、何かをまちなかで実施するにしても時間帯を絞って実施する必要がある。
- ・検討会議では、誰か個人ができること、ではなく、共にできることを検討していきたい。

■事務局

—実証実験、アンケート、ワークショップについて、取組内容案の説明—

■篠田座長

- ・実証実験の内容については、商店街、学生、大学の方々と共創して実施したいと考えている。協力をお願いしたい。
- ・アンケート調査の実施については、必須であると思う。肌感覚の部分を実際の数字で拾い上げたい。

■事務局

- ・アンケート調査については、7月下旬までに発出予定。できる限り多くの回答を得たいので、委員の皆様にも周知等ご協力願いたい。

■篠田座長

- ・アンケート調査項目については事務局に一任したい。
- ・ワークショップについては、学生と地域を繋ぐイベント企画やコーディネート経験等の実績を持つ仁志出委員に一任したい。

■仁志出委員

- ・以前にも、今回の検討会議にて意見交換を行ったような内容について意見を交わすワークショップを複数回、実施した経験がある。ワークショップだからこそ、何か得るものがあるのではないかと思う。
- ・ワークショップについても、委員の皆様と連携して実施できたら幸い。
- ・学生当事者の意見だけでなく、卒業後、他地域に出た人の意見も聞く価値があるように思う。

■篠田座長

- ・ワークショップ参加者はどのようなメンバーを想定しているか。

■仁志出委員

- ・第1回はまちなかにいるメンバーでのワークショップを想定。その後はオンライン等で開催し、メインは学生当事者としつつ、大学を卒業したばかりの方や商店街や地域の方も参画いただくことで多様な意見を集められればと考えている。

(4) 今後の展望

事務局から、今後のスケジュールについて説明。